

編集部が迫る！



発達保障つて
なんですか？

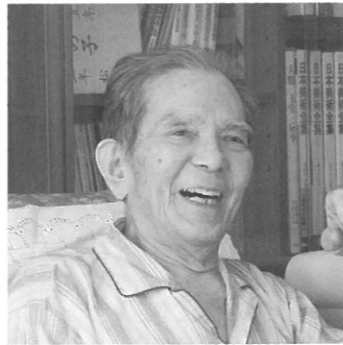
敗戦と価値観の崩壊

今となつては恥ずかしいことですが、私は、1945年5月15日、敗戦の3カ月前に海軍に志願して、海軍特別幹部練習生に入隊しました。その後、舞鶴海兵団に一月いました。配置換えがあり、本土決戦要員になりました。

敵戦車が30メートル以内近づいてきたら、戦車のキャタピラのところを死角になる。その時を狙って飛び出して、爆雷を抱えて突っ込む。もちろん飛びこんだ人も死ぬ。その訓練をやっていました。「自分の人生の見直しはついた。死ぬ覚悟はできている」と、わが身に言い聞かせたものです。

それが、1945年8月15日の暑い日でした。その日も演習場での訓練をして、兵舎に帰ろうとしていた薄暗くなった頃、全員広場に集合の指示があり、「いよいよ第一線に配置か」とささやきあつて整理すると、「降伏。戦争終結」を告げられました。からだの芯の棒が崩れたような虚脱感、みんなその場に立ちすくんだままでした。戦争が終わつて、戦争犯罪人はそれなりの処遇をされました。民主主義という新しい理念をもつて、憲法も何もかも変わつていく。「これまでとちがうんだ、変

松本 宏さん 上



まつもと ひろし

1928年京都府京丹后市生まれ。元教員。与謝の海養護学校、桃山養護学校、丹波養護学校といった、京都における養護学校づくりにかかわり、校長も歴任する。全障研京都支部顧問。

のはどんな人でしょうか？ 論文にも興味があります」と添え書きしました。そうしたら「愛護」の編集者が電話してきて、田中さんも「松本とはどんな人間か」と言われており、「君とまーちゃん（田中昌人）となら、あうやる。紹介しとくし、会わせるわ」と言われました。編集者を介して、お互い紹介しあい、電話でも話せる仲になりました。

そして、当時、近江学園から発信された「発達保障論」に接しました。このときの論文と田中さんとの出会いが、私が後に与謝



▲引き継がれる思い。右から吉田悦男さん（元与謝の海支援学校教員）、荒瀬耕輔さん（京都府立中丹支援学校）、石田誠さん（与謝の海支援学校）、安藤史郎（編集部）



◀玄関に飾ってある松本さん直筆の銘板（桃山分校は次回登場）

わるんだ」ということがわかっていながら、「国にだまされた。その手先にだまされた」との思いから社会不信になりました。その後は、自己のあり方にぐずぐずと悩みながらも、大学の通信教育の課程に入り、政治経済のこ

障害児教育、田中昌人さんとの出会い

1954年度の京都府教員採用試験があつたので、中学校社会科を受けてみました。試験は合格したけども、採用人数より超過してしまいました。私には、「小学校に行ってください」と言われたのですが、小学校は自信がないし、免許状もないので止めました。8月になって再び呼び出しがあり、「君は教員をやる気はあるのかなのか？」と聞かれました。とっさに「まったくない」と言ってしまったら、「ここに行け」と言われました。それが浜詰小学校でした。1年勤めてみて、まあもう1年やってみて、やめるならいつでもやめられると思いつつ、やっていると、教員の勤務評定問題が出てきました。これは、教職員の団結を破壊し、教育の権力統制を意図するものであると、勤務評定反対闘

の海養護学校に参加したときの、障害児教育についての理論と実践の基礎になっていきました。すべての子どもに教育を保障する

京都の桃山学園にいた頃のとりくみの一つに、学園児の「学籍問題」がありました。教員が派遣されていくのに、学園児に学籍がつけられていなかったのです。それは何ごとだ、と思いましたが、制度的に公教育から除外されたまま。学園児のなかには、地域の小学校に就学させてもらえず、ここなら教育を受けさせてもらえるかもしれないと、桃山学園に入園してきた子もいました。子どもたちに学籍がない、そんなことを知って放っておいたら、子どもたちに無責任な話。京都市教委に訴えたけれども、けんもほろろ。「学校長は教員の給料を払う、それ以上のことはせんでもいい」とのことでした。府教委は「市の権能を侵すことになるから入り込めない。その課題は前からあるけれど、そ

つとしておくべきこと。学園のなかには就学猶予・免除の子もいるはずだから学籍をつけなくてもよいのではないか」ということでした。桃山学園児の就学猶予・免除は認めない、いかなる重度の子ど

争が起こりました。

1957年に、私は、立候補したのではないのですが、竹野郡の300人の教職員組合の書記長になってしまいました。組合の委員長・書記長は、教唆・煽動者ともなされていきました。革新的な若手校長が新任で浜詰小学校へ来たのですが、1年経つたときに、「松本くんよ、これ以上は君を浜詰で持てんわ。どうだ、動かんか」と言われました。私がいることで先生に迷惑をかけられないと思ひ、浜詰小学校から隣の郡の久美浜町へ異動しました。

久美浜の田村小学校で4年して、異動希望を出したら、1964年4月、精神薄弱児入所福祉施設・京都府立桃山学園の派遣教員になりました。

赴任したときに「これ読むか」と学園の指導課長が私のデスクに『愛護』という月刊冊子を置いてくれました。そのなかには田中昌人さんの「精神薄弱児の発達」が連載されていました。最初に開いてみたときは、「難しいことを書く人もいるものだな」とそのままにしていましたが、どうも気になつて後日読み直してみました。寝転びながら読んでいたのですが、そのうち座り直していました。ア

もも学籍をつけて学校教育を保障しようとする私たちとの論争は堂々巡りでした。

同じ頃、向日が丘養護学校で肢体不自由重度の入学希望者不許可措置について、保護者を中心に府教委交渉が繰り返されていきました。1967年に、全障研が発足しましたが、ちょうどそういうことも、障害児教育の量的、質的な充実期というプロセスだったのだと思います。

そのような流れもあり1968年4月、学園児全員の学籍は、地元桃山小・中学校につけられ、施設内学級として認可されました。

*

桃山学園での「学籍問題」は、障害のある子どもが教育を受けられない、それを知っておきながら子どもを放っておいていいのか？という、私たちのなかにある一つのヒューマニズム、そのあたりが私たちの琴線に触れたのだと思います。

ちょうどその頃、桃山学園に与謝の障害児教育研究会の面々が視察に訪れたとき、後に与謝の海養護学校の校長となる青木嗣夫さんと知り合いました。そして、全国障害者問題研究会京都支部の結成などにもともに活動する同志となつていきました。